

# 声から笑顔が伝わる「笑声」で話すことで コミュニケーションがぐんと取りやすくなります



「ご出身は県外だそうですね。福島県で暮らすようになったのはいつからでしょうか。」

生まれは神奈川県です。大学ではアナウンス研究会に所属し、アナウンサーを目指していましたが思うようにならず、卒業後、一般企業に就職しました。でも、どうしても夢を諦めることができなくて退職して再び就職活動を行い、NHK福島放送局のキャスターに採用され、平成16年に来県しました。夕方のニュース番組を3年ほど担当していましたが出産を機にフリーに

なり、今は司会やナレーション、FMポコのパーソナリティーなどを行っています。

「名刺に「朗読家、アナウンストレーナー」とある通り、声に携わる活動をされていますが、絵本の読み聞かせに力を入れるようになったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。」

震災の時、家族で避難所になった保育所で過ごしていたのですが、そこにあった絵本を当時1歳と3歳の子どもに読んでいたら、周りの子どもたちも自然と集まってきて、さながらお話し会のようになりました。他のお子さんに読むのは初めてでしたが、余震の続く不安な時期に、絵本の世界に触れることで子どもたちが優しい表情になり、それを見た親御さんも喜んでくれて。読み聞かせは、大人にとっても子どもにとっても意味のあることなんだなと感じ、それから独学で絵本について学ぶようになりました。



小学校では読み聞かせの他に、さまざまな本を紹介するブックトークや、アクセントの指導も行っている

「小学校でも、毎月読み聞かせを行っている」と伺いました。

子どもの通う小学校から依頼を受けて始めました。ある時、お薦めの本を読んでもあまり関心を持ってもらえず、別のクラスで読み方を変えてみても反応が今ひとつだったことがあったんです。私はあくまで、大人の目線で楽しい物語を選んでいただけに気がきました。それからは、子どもがどのようにイメージするか、子どもの目線を

意識するようになりました。

小学校では音読の宿題があるのですが、息子が家で読んでいるのを聞き、言葉の意味や気持ちを感じながら読む力を教えていきたい。そう感じて、今年、子どもアナウンス発声協会の認定講師になりました。読むことを通して、子どもたちに声の出し方をはじめ、自分の思いをどう表現したらよりよい友だち関係が築けるかなど、伝える力も教えていて、夏休みには子ども向けの講座を予定しています。



桜の聖母生涯学習センターでの朗読講座の様子。朗読と絵本に関する3講座を受け持っていて、80代の生徒もいるという



「高齢者の施設でも、絵本の読み聞かせをされているそうですね。」

朗読講座の生徒さんに、ご家族の100歳のお祝いにと頼まれたのが最初です。訪問する際には、読み聞かせの対象となる人がどんな人生を送ってきたのかを伺い、こんな絵本なら喜んでくれるのではと考えて臨みます。読み聞かせを通して記憶の糸がつながり、家族も知らなかつたようなエピソードを話し始める方もいて、絵本がコミュニケーションの手段になっているんだと感じます。

大学時代に朗読の勉強をしていた頃は、いかに印象的に読むかばかりを考えていませんでした。その頃祖母が亡くなったのですが、認知症の方が、絵本を読むことで昔のことを思い出したり、表情が柔らかくなり笑顔が増えたりするという



絵本をきっかけに見せる、読んでもらう人のさまざまな表情がやりがいになっている

「絵本は、子どもだけのものではないのですね。」

ノンフィクション作家の柳田邦男さんが「絵本は人生に3度読むべき」と言っています。子どもの時は親に読んでもらい、自分が親になったら子どもに読み、年齢を重ねてからは自分のために読む。小さい頃に読んでいた絵本を大人になって読むと、こんなメッセージがあったのかと気付かされることがあります。読む人のそれまでの人生が反映されるので、1年後に読めばまた新たな感情が出てくるかもしれない。そんな変遷を感じられるのが面白くて、今あらためて、大人にこそ絵本が必要ではないかと感じていきます。そんなことを伝えていきながら、年代を問わず、絵本で皆さんが豊かな気持ちになつてもらえたらいいなと思っています。

ことの葉パレット

<https://hikita-saiko.wixsite.com/kotonoha>